

「私にあるものをあげよう」  
使徒言行録 3 章 1-10 節

私たちは、目に映るものすべてをはっきりと見ているわけではなく、無意識のうちに自分に  
関心のあるものを選んで見えています。それは信仰生活でも同じです。私たちは何を見て生きて  
いるでしょうか。目先のお金や生活の安定、自分に「足りないもの」でしょうか。それとも主  
ご自身でしょうか。今日の聖書に登場する生まれつき足の不自由な男性は、神殿の前にいな  
がら本当に見るべきものを見失っていました。しかしこの日、ペトロとヨハネを通して彼の視線  
は大きく変えられていきます。

この男性は 40 年もの間、毎日神殿の「美しい門」の前に運ばれ、礼拝に訪れる人々から施し  
を求めて生きていました。本来、ユダヤの信仰における「施し」とは、単なる慈善活動ではな  
く神の憐れみを示す信仰行為であり、受け取る側にとっては「神はあなたを忘れていない」と  
いうしるしとなるものでした。しかし、あまりにも長い苦しみの中で、男性の目はいつしかそ  
の背後におられる「神」ではなく、今日を生きるための「施し（お金）」だけを見るようになっ  
ていたのです。

神の家のすぐそばにしながら、礼拝の交わりの外側に置き去りにされ、自分の人生を少しも  
美しいと思えない日々。神の前に集いながらも、恵みより目の前の問題や不足ばかりを見てし  
まうこの男性の姿は、どこか私たち自身の姿でもあるのではないのでしょうか。

しかし、神はうずくまる彼を決して忘れてはおられませんでした。詩編 146 編に「主はうず  
くまっている人を起こされる」とあるように、神はペトロとヨハネを彼のもとへ遣わされます。

ペトロたちは男性から施しを求められたとき、立ち止まって彼を「じっと見つめ」ました。  
それは、多くの人のように彼を素通りせず、一人の人間として深く向き合い、受け止めるキ  
リストのまなざしでした。そしてペトロが「私たちを見なさい」と語りかけたのは、自分たちに  
注目させるためではなく、男の視線を「施しを見る人生」から「神を見る人生」へと変え、自  
分たちのさらに先におられる主イエス・キリストへ向けさせるための招きだったのです。

そこでペトロは、「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう」と言います。か  
つて主を裏切り、絶望の底から復活の主によって立ち上がらせてもらったペトロには、自分が  
受け取った確かな「キリストの恵み」がありました。

ペトロが「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」と宣言して  
彼の手を取ると、男の足はたちまち強くなり、歩き、躍り上がって神を賛美し始めました。彼  
にとって最大の奇跡は、単に足が治ったことではありません。神を賛美しながら、これまで入  
れなかった門の「内側」へと進み、神の家族の交わりのなかに迎え入れられたことです。救い  
とは、目の前の問題解決にとどまらず、神との関係が回復し、神を賛美して歩む人生へと新し  
くされることなのです。

私たちは年齢を重ねるにつれ、健康や若さなど失うものばかりに目が向き、希望を失って座  
り込んでしまうことがあります。しかし、私たちキリスト者には「決して失われないもの」、す  
なわち今も生きて私たちを見つめてくださる主イエス・キリストがおられます。

ペトロの「私たちを見なさい」という言葉は、今も私たちを「主イエスを見なさい」という  
招きへと導いています。私たちもまた、「私にあるキリストをあなたにも知ってほしい」という  
確信を胸に、日々の現実のなかで主を仰ぎ見ながら、今週も新たな一歩を歩み出してまいりま  
しょう。